

これからの初年次教育 —学会設立 10 周年記念大会を迎えるにあたって—

藤本元啓
崇城大学

昨年 6 月から、会長を務めさせて頂いております。何卒よろしくお願ひいたします。

さて、2007 年 12 月に初年次教育学会が設立趣旨を発表し、翌年 3 月に同志社大学で設立大会を開催してから 10 年が経過しました。この間、中央教育審議会は、「学士課程教育の構築に向けて」(2008)、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(2011)、「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて」(2012)、「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について」(2014)、「個人の能力と可能性を開花させ、全員参加による課題解決社会を実現するための教育の多様化と質保証の在り方について」(2016) 等々、高等教育に関する答申を矢継ぎ早におこなってきました。

個別の問題点はおくとして、巨視的には高等教育全体の質的な再構築とその保証を求めたものであり、教育の在り方を再考させるものとして、今日の大学教育改革に大きな影響を与えています。あたり前のことですが、初年次教育が学士課程教育のスタートに位置していること、そして「入学した学生を大学教育に適応させ、中退などの挫折を防ぎ、成功に水路づける」(学会設立趣意書) ことであることを、改めて認識させられるのです。

これまでの大会報告を振り返りますと、実践事例報告、それもプログラムの内容や方略に関するものが多かったのですが、最近では評価方法や成果そのものに関する報告も増えてきました。さらには、「3つのポリシー」や学士課程教育におけるカリキュラムとしての位置づけ、高大接続と連携のありかたなどに意識が向かいつつあります。一連の答申にもとづく初年次教育の「内容と質と成果」の検証がいよいよ始まったようで、新たな段階に踏み込んだ感があります。

このような初年次教育を取り巻く環境の変化に鑑み、10 周年記念事業のひとつとして、『進化する初年次教育』の刊行を企画しました。内容は、初年次教育をとりまく課題、カリキュラムとしての初年次教育、初年次教育の実践的方法の 3 部構成で、16 名の論考を掲載する予定です。いまひとつ、会員による効果的な初年次教育の実践例と成果を広く紹介するために、「教育実践賞」を新設しました。選考は報告書類だけではなく、大会でのポスター発表を条件とし、参観者の評価(投票)を参考にする手法を採用することにしました。

来る 9 月の記念大会(酪農学園大学・北海道)では、初年次教育は学生に何をもたらしことができるのか、という本質的な命題について、記念書籍をお手元に議論を深めていただければ幸いです。そしてその成果が、各大学の諸条件に沿った、しかも仕掛け倒れのない初年次教育の構築と実践、さらには検証につながることを願ってやみません。

(初年次教育学会会長)